

バチバチと音をたてています。神輿をヨーサー・ヨーサーとねりまくるさまはみごとでした。休むことなくヨーサー・ヨーサーの掛声で行列は進行します。神輿の後にはトウニン・神主さんが二頭の馬にまたがり、馬使人付きで馬上豊かに続きます。村の役員さんは、紋つき羽織、袴、山高帽子に青竹の警棒を持ち、祭事全般の警護にあたりました。

お旅とは、上宮の神吉八幡神社から大国の下宮へ神輿が行列を作って行くことです。行列は延々長蛇の如く続き下宮入りします。神事の終了後昼食となり、大人はお酒をのみ、お祭りの弁当のご馳走と鯖ずし等で舌鼓をうちました。お旅は、今度は、下宮から上宮へ行列して帰ります。神輿行列の先頭は、お先太鼓のトントントンに導かれ桜花の満開を思わせる奉桜花十本の美しさ、ヨーサー・ヨーサーの掛声と共にお旅を終わりに上宮に帰着します。

沿道には稲穂が実り、黄金色の波がたなびき村人一同、豊作を祈り楽しくお祭りの行事は終了しました。

祭りの思い出

原 好信

大正八年生

私の小学校時代（大正の終わりから昭和のはじめ頃）の氏神さま（神吉八幡神社）の秋祭りは十月十六・十七日でした。

十月十七日は戦前の「神なめ祭」で、神さまにお供えするという国の定めた祭日でした。

毎年、十月十六日の宵宮祭の夕方には、各家の軒先に御神燈の提灯（ちょうちん）を吊るして、人々は夜のお宮参りをしました。

十七日の昼宮祭には、当番の村から「じんじ」（神幸式の行列）が出て、宮前の上の宮から大国の下の宮まで往復するという、今と同じような儀式がありました。子供たちは、小遣いをもらってお宮へ行くのが何より楽しみでした。

昔はこの付近の人々は大部分が百姓（農家）だけの生活で、現在のような豊かな暮らしではありませんでした。一年中でゆっくり身体を休めるのは正月と盆と祭りだけで、それ以外は朝暗いうちに田んぼに行き、日が暮れてから家へ帰るとい生活で、そうしなければ食べていけなかったのです。小学校の三年生になると誰もが田んぼ行きの手伝いか、小さい弟や妹の子守りをさせられて、ひとりで遊ぶことは許されませんでした。それが祭りになると小遣いをもらって遊ばせてもらえるので、こんな嬉しい日はなかったのです。家では祭りの前日に鯖のすしと巻ずしをこしらえ、甘酒を入れました。お祭りの日だけはお母さんもご飯炊きをしなくてもよいようにしたのです。

私の小さい頃、祖母がよく言っていました。「まつり、ま

つりと待つのが祭り」。昔の人々は、お祭りを一年中で最も楽しい行事として心待ちにしておりました。しかし、そのお祭りもたったの一日でアツと言う間に過ぎて行きました。ほんとうの楽しみは、指折り数えて祭りの日が来るのを待っている間、それこそが「祭り」なのだという意味であったと思います。

戦前は家長制度であったので、村が当番の年に役につくの

は、兄弟が大勢

いても長男に決

まっています。

私も長男に生ま

れたので七才の

年に「おかし」

で弓をかつぎま

した。十五才の

年は「みこし」

の最年少で「か

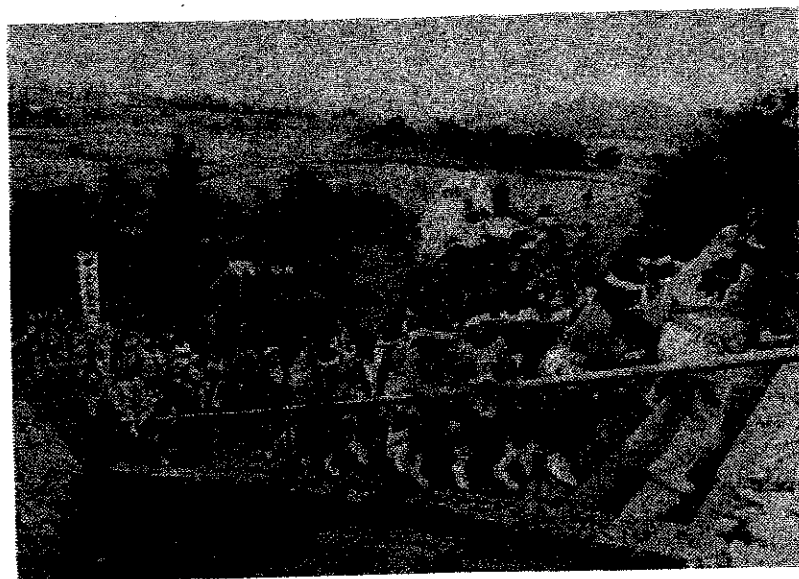
つぎ」という役

をしました。そ

して二十三才の

当番の年には召

集で軍隊に入っ



宮入りする子ども神輿

たため、お祭りには私の弟が出ました。昭和十八年には戦争のためお祭りの行事はとりやめになりました。終戦後、徐々に復活して最近ではほぼ昔に近い行事が行われるようになりました。

氏神さまは、私達この土地に住んでいる人々が祖先伝来の敬神を心の寄りどころとしておまつりしているのであって、この土地の平和と繁栄を心からお祈りする行事であります。今後とも私達は謙虚な気持ちでこのお祭りを続けていきたいものだと思います。

まつりの思い出

富木 平位 信治

明治二十七年生

氏神 秋祭

私の若い頃（明治中期）は神吉八幡宮の秋祭は毎年十月十五日でした。十月七・八日頃から二十日過まで各地で氏神祭が続きました。親類同志互いにお祭りに御招待をし合いました。招かれて行くと泊りがけでゆっくりと酒や御ちそうをいただき、家の人々といろいろと話をし、連れ立って宮へお参りしました。帰宅の際は、鯖寿司・甘酒をお土産として重いほどいただき、留守の者に喰べさせ、喜ばせたものです。

神事（じんじーみこしの渡御）



赤 (猿田彦)

神吉八幡宮のお祭りの中心といえどもみこしの渡御でした。道順はその年の当番の村により違っておりまして。上の宮を出て宮前村より西へ志方街道から大國の下の宮へ行くこともあれば、東へ神吉巡りもありました。帰りは西村の方へ帰りました。当番の村は八朔（はつきく）旧暦八月一日）の翌晩から四手振りの少年とみこしをかつぐ青年とが集まり毎夜稽古（けいこ）を続けました。みこし練りとは四手の振り方に従いみこしを肩より下し、屋根を左へ倒しました右へ倒し、上に上げ、下に下げ、それを二・三度繰り返す行事です。行列は先導に「赤」二人・四手振り・みこし・後へ「赤」二人・村の長老四・五人警護として杖を持ってこれに従い、神

主さんが馬にまたがり最後に続きました。そしてその後には参詣人が多勢ついて「チョーサー。ヨーサー」の四手振りのかけ声とみこしかきの合唱で行列は進行しました。上の宮では出発の時と帰った時と二度、下の宮では到着の時と出発の時と二度、途中の村々で一度あてみこしを練ります。氏子はもちろん近隣の村々から多勢の参拜で上の宮も下の宮も境内は大にぎわいでした。戸店（露店）は、境内のまわりや沿道につらなり誠に優美でにぎわしい渡御でしたが、今日のように大きな自動車の走り連なる道路では復活のしようもありません。

八幡神社の祭

富木 平位 婦美

明治四十年生

村に当番が廻って来ますと、「今年は当番が当たったから。」と数日前に親戚へ案内をします。そしてその客の接待の用意として甘酒を作り、鯖寿司（さばずし）を作ります。鯖寿司は二三日前より大きな塩鯖を三十尾、五十尾も用意し大きな押寿司の箱に三段、四段と詰め大きな重石を載せて三、四日保存します。昔は鯖の頭にも御飯が詰められていました。宮前の八幡神社は西神吉の中で辻と岸が氏子ではありませんでした。小学校の時、八幡神社のお祭はお休みでしたが、

後、辻・岸のお祭も休みになったように思います。

秋に当番が廻って来ますとおみこし行列を出します。三世代そろった健康な家庭の男児が頭人さんになります。また女は不浄の者として神事には参加できませんが女兒が出生しますと奉桜花を出します。私の家でも作った事があるように思います。おみこしはさらしで飾られます。真黒くつややかなおみこしに白布が映え神々しく感じます。また、当日神主さんや頭人さんの乗られる馬もやはりさらしの布で飾られますと、一段と美しくおみこしと共に清々しく心が洗われるように思われました。四手振りには十才前後の男児がおそろいのじゅばんにたすきをかけてします。今の子供みこしの四手振りと同じように思います。みこしをかつぐ青年とまだ小さい子供の掛け合いの声。勇壮と言いますか私はお祭の中で一番好きでした。今でもあの声は耳に残っています。お徒歩(かち)と言って紋付はかまに陣笠の男児も行列に参加しました。

おみこしの行列は午後三時頃には上の宮に上り、おみこしは舞台に安置され、神事が行われました。その時本殿からおみこしまでの道は人垣でいっぱいです。その道は神事の終わるまで誰であっても横断することはできません。時折子供が横断しようとして「赤」に引きもどされて泣いている事がありません。おきては必ず守らねばならないというきびしい躰(しつけ)があったのでしょうか。警護の人も黒紋付羽織は

かまで、青竹を持った人達、このような人達の心から神を祭る静かな落ちついた行列。そしてある時は掛け声勇しくおみこし共々練るあの激しさ。いつまでも心に残っています。今一度見聞きたいものと願っております。

